

旧石器文化の多様性と東アジア

阿子島 香

〔東北歴史博物館館長講座概要：歴史博物館グローバル紀行〕

Part2: モノが語る人類史」①

2025 年 4 月 26 日

講座要旨

今年度の館長講座は、昨年度に引き続くシリーズでお話します。「歴史博物館グローバル紀行 part 2: モノが語る人類誌」と題しまして、世界各国の博物館を、皆さんとご一緒に巡ることにします。考古学と歴史を中心に、海外のミュージアムを訪ねて、世界史の流れを東北地方と関連させて考えていきます。全8回の連続講座ですが、各回は独立した内容ですので、お楽しみください。全体の内容は、次のように予定しております。①旧石器文化の多様性と東アジア、②原始の時代区分と縄文文化、③古代ローマ：ポンペイとガリア、④中世フランスの美と遺産、⑤近代アメリカの光と影：西部開拓史、⑥世界民族誌と東北旧石器人の文化適応、⑦世界民族誌と東北縄文社会の復元、⑧東北の基層文化論：縄文とエミシ、の順でお話します。これまでに私が調査研究を行なってきた地域の博物館を主にして、人類の歴史すなわち世界史の、さまざまな面に触れていきます。またお話の内容では、時々、旧シリーズ「東北グローバル考古学」の、全24回の内容と関連させつつ、参照していきたいと思えます。旧シリーズは、引き続き東北歴史博物館のHPにて、講座概要を公開しております（多くは「読む館長講座」として、改めてエッセイとして再構成したのになっています）。あわせてご参考としていただければ幸いに存じます。

世界史の流れという漠然と感じられるかもしれません。もっと具体的には、通年のテーマとしまして「時代区分」ということの意味を考えていきたいと思えます。教科書などでは、当たり前のように「原始」「古代」「中世」「近世」「近代」「現代」となっていますが、いったい何がどう変わったのでしょうか。考古学、社会史、経済史、美術史、人物史、また現在の民族誌などの切り口で、それぞれの時代の特徴を探っていきましょう。みなさんと一緒に、「学び直しの世界の旅」に出たいと思っています。

今回は、原始時代のさらに以前を訪ねます。「太古」といっても良いのでしょうか。人類進化と文化の黎明期である「旧石器時代」を取り上げて、実は時代区分の「原始」とは、いくつかの、本質的に異なる時代を総称しているものである、ということを理解したいと思えます。

人類が類人猿の祖先たちと分岐したのは、およそ700万年前と推定されます。チンパン

ジーの祖先と枝分かれして間もなく、二本足で直立することから、人類の歴史が始まりました。最古の化石は、アフリカのチャド共和国で発見されている「サヘラントロプス・チャデンシス」とされます。2001年にフランスの調査隊が発掘して、大きな反響を巻き起こしました。愛称は「トゥーマイ猿人」。そして何種もの「猿人類」の仲間が登場しました。代表的なのは、「アウストラロピテクス類」で、アファール猿人は、約370万年前に生息していました。タンザニアのラエトリ遺跡では、二本足で歩いた足跡の形跡が、火山灰の下層から発掘されました。アファール猿人では「ルーシー」と名付けられた個体が有名です。猿人の発見は、1920年代まで遡ります。南アフリカ共和国で石灰岩地帯の地層の裂け目（フィッシャー）などから、レイモンド・ダートにより動物化石と共に太古の人類化石が発見されて、人類と類人猿の共通祖先から進化する過程をしめす「失われた鎖の輪」（ミッシング・リンク）と考えられました。

最古の石器は、エチオピア北部ハダール地方で見つかり、約250万年前にさかのぼります。それ以降が「旧石器時代」になります。タンザニアのオルドヴァイ峡谷からは、多くの化石や石器がリーキー一家の活躍もあり発見されました。初期の石器文化は礫に単純な加工を加えて作られ「オルドワン」型と言われます。約200万年前になると、人類の進化は原人の段階に入りました。ホモ・エレクトスとしてまとめられる多くの化石人が、アフリカから外に出た人類の拡散を示します。インドネシアのジャワ原人は100～130万年前に遡るとされます。中国周口店の北京原人（約70万年～20万年前）も、ホモ・エレクトスに分類されます。原人が地球上に拡散した前期旧石器時代は、世界的には大きく東方と西方の二つの文化圏に分かれていたという定説がありました。「モヴィウス・ライン」と呼ばれる境界で、インド付近から東の「チョッパー・チョッピングツール文化圏」、西の「ハンドアックス文化圏」です。ハンドアックスは、両面加工の石核石器です。

今回探訪するミュージアムは、韓国京畿道ヨンチョン郡の「全谷先史博物館」です。北朝鮮との軍事境界線の近く、イムジン河の流域で、1977年に米軍人により石器が採集されました。両面加工のハンドアックスで、ヨーロッパ・アフリカの「アシュール文化」に類似する可能性が指摘され、韓国の旧石器専門家を中心にした発掘調査が1979年～2009年にかけて、継続的、大規模に実施されました。全谷里（チョンゴンニ）遺跡は、玄武岩層が基盤の台地上に、赤色粘土層と砂層が重層し、多量の石器が出土して、国際的にも「アシュール文化は東アジアに到達したか？」という大きな問題提起となりました。ハンドアックス、クリーヴァー、ピック、スフェロイド（球形石器）などがあり、多くは石英系の硬い岩石で製作されました。全谷里遺跡には、2011年に大規模な史跡博物館が整備されました。銀色に輝く超モダンな建築の中に、猿人から現生人類までの歴史を示す進化の「大行進」展示、世界の旧石器時代文化、ヨーロッパのクロマニヨン人洞窟壁画の復元など、多彩な展示が充実しています。講座では、博物館開設記念として開催された、フランスの第一人者を招いての第2回世界バイフェース（両面加工石器）国際会議の模様もご紹介します。全谷里では、毎年5月上旬に「旧石器まつり」が大々的に行われ、多くの市民の学びの場となっています。

仙台市市民文化事業団（地底の森ミュージアム）とは、相互の連携協定が結ばれて全谷里旧石器まつりへの派遣もあり、日韓の旧石器考古学の橋渡しにもなっています。

トピックス

以上は、全体の要旨です。以下に、スライドで解説した内容から一部を選んで、项目的に紹介します。

講座の「お題」

・今回の「お題」です。人気番組（ブラタモリ）にあやかって、昨年度から毎回、お題として講座のテーマを提示しています。「人類の歴史」なんという大きな言葉でしょう。人類の祖先と霊長類の祖先が枝分かれして、およそ 700 万年、石器が作られるようになって、およそ 250 万年、ホモ・サピエンス（新人）に進化して、およそ 20～30 万年、アフリカから外に出ておよそ 6～10 万年、第二次「出アフリカ」**Out of Africa** です。（第一次「出アフリカ」は、およそ 200 万年前の原人の旅路）。新人類が日本列島に到達しておよそ 4 万年（多数学説）、あるいは新人以前で 7～8 万年以上前（館長など少数学説）、それから縄文時代に変化するのが 15500 年前頃でした。土器の製作は東アジアが世界最古です。そして旧石器時代が終わります。この間の期間で、最古の石器製作以降の、99.4%を占める旧石器時代の長さでした。この遠大な時間を、どのように「時代区分」すれば、人類史の流れをよりよく理解できるのでしょうか？ 言葉を換えると、我々人類とは、いったい何者なのでしょう？ この途方もない時間の長さ！

年間テーマ「時代区分」

・標準的な日本の歴史学では、最古の時代区分は「原始」とされます。その次が「古代」です。けれども、人類の身体および文化の進化史を考慮すれば、「原始」を少なくとも二分する時代区分が妥当と考えます。新人の登場以降と、それ以前の人類の時代です。あえてもう一つ区分すれば、人類が石で利器を作るようになった後と、その前、すなわち石器製作以前以後となるでしょうか。この区分は、人類の生活状況と生産の仕組みに対応するでしょう。ホモ・サピエンスの登場がいかに人類史の大転換点となった「革命」であったかについては、2021 年度、2022 年度の館長講座で、何度か取り上げています。継続して聴いていただいているお客様、いつも有難うございます。考古学では「上部旧石器の革命」とも言います。あるいは近年「認知革命」という海外の学者もいます。そこで、総称としての従来の「原始」を区分して、「太古」と「原始」（狭義）では、いかがでしょうか。日本列島史ですと、狭義の「原始」は、後期旧石器時代、縄文時代、弥生時代となるでしょうか。

全谷先史博物館の進化展示

・韓国・ソウル郊外の全谷先史博物館が開館して 14 年になります。何度も訪問しましたが、

そのたびに、人類進化の姿を復元した行進の展示に、深く印象づけられます。猿人、原人、旧人、新人を、単に段階区分として展示するのではなく、具体的な化石資料の個別研究に基づいて製作された、多くの精密な復元模型たちが並んでいます（スライド）。広い展示室の中心にあって、象徴的です。周囲には、マンモスやヤギウ、シマウマ、エルクシカなどもあります。行進展示の周囲の空間には、石器、化石、洞窟壁画（クロマニヨン人）をはじめ、世界各地を取り上げて、テーマを掘り下げた展示があります。もちろん前期旧石器時代の東アジア的多様性を考えるきっかけとなった、全谷里（チョンゴンニ）遺跡から出土した両面加工石器（ハンドアクスやクリーヴァーなど）も、豊富に展示されています。

フローレス人

・原人に続いて、妙な小さい人類の復元がありました。近年、大きな話題となった、インドネシアの洞窟遺跡から発掘された「フローレス人」のようです。ジャワ島の東にあるフローレス島に所在するリャンブア洞窟で、約 10～6 万年前の地層から化石骨が出土しました。インドネシア国立考古学研究センター（ARKENAS）を中心に、1999 年から発掘が開始されて、2003 年に人骨が発見され、LB1 という標本個体にホモ・フローレシエンシス（*Homo floresiensis*）という学名が付けられて、古人類学界の大きな話題となりました。小人族を表わす「ホビット」という文学的ニックネームがあり、成人の身長は 105 cm 位と推定されています。2015 年までに 15 体分以上の人類化石が発掘されています。日本からも、国立科学博物館、東京大学総合研究博物館（海部陽介氏ほか）など国際研究が実施されています。海部氏によれば、ヒトが矮小化したのは、少なくとも 70 万年前から始まることで、熱帯の孤立した火山島での隔絶された進化過程を要因としています。同島のソア盆地では、100～70 万年前の石器と、人類の下顎骨・歯が発見されています（2014）。孤立した環境において、矮小化する「島嶼化現象」は他の動物種でも認められるとのこと。

全谷里史跡公園の旧石器まつり

・全谷里遺跡で初めてハンドアクスが確認されたのは、1978 年でした。翌 79 年から発掘が開始されて、現在まで継続的に調査研究されており、韓国を代表する前期旧石器時代の遺跡として著名です。スライドの例は『韓国旧石器文化研究』（韓国精神文化研究院、1979 刊）の図版からです。全谷里遺跡は現在、広大な史跡公園になっていて、その一角に先史博物館があります。建築的には、曲線を多用した銀色に輝く建物で、近未来的な雰囲気があります。建物の形は、石器をイメージしているとの説明です。

史跡公園では、毎年 5 月上旬に韓国でも端午の節句がありますが、この頃「旧石器まつり」が開催されます。全国から数十万人の人出があり、京畿道の一大イベントになっています。講座では、その様子を詳しく紹介しました。ヨンチョン郡長あいさつから、アイドル歌手のショーまで多彩です。中でも、原始人に扮した人々が叫び声をあげて踊る旧石器ハンターの登場は、人気の出し物ということです。この一大まつりイベントを始めたのが、ハンヤ

ン大学（漢陽大学校）教授のペ・キドン先生でした。発掘調査の初期に、ささやかな行事から始めた頃の話、先生から直接お聞きしました。思い出すと、1980 年代初め頃、ペ先生はカリフォルニア大学に留学中、私はニューメキシコ大学に留学して一旦帰国後、芹沢長介先生のところに、日本の旧石器使用痕分析についての問い合わせがあり、東北大学使用痕研究チームの成果物一式を送ったことが、お付き合いの始まりでした。ペ先生は 2017 年に退職、私は 2021 年に退職しましたが、現在まで交流が続いています。

ハンドアクス文化の発見

・1977 年に、全谷里公園にきたアメリカ軍人、グレック・ボーウェン氏が、偶然に石器を見つけました（スライド）。その後石器はソウル大学の金元龍（キム・ウンヨン）教授に届けられ、韓国考古学全体のパイオニアであったキム先生から、石器時代の専門家でフランス留学経験もあるチョン・ヨンファ助教授（嶺南大学）に相談され、旧石器時代の古い石器の可能性が指摘されて、本格的な発掘調査が開始された研究史があります。韓国での旧石器の最初の発見は 1964 年、忠清南道公州市の石壮里遺跡でしたが、後期旧石器を主として研究されていました。全谷里遺跡の一隅には、旧博物館の裏手にキム先生の記念碑があります。私も最初に遺跡を訪問した時にお参りをしました。出土した地層断面の展示、初期の発掘時の記録などの展示もありました。

・全谷里遺跡が立地する地域は、軍事的な緊張がある一帯です。北朝鮮との境界付近で、イムジン河（臨津江）が流れています。川岸には、武装した兵士が見張りを行なう施設があちこちにあり。非武装地帯（DMZ）を視察するツアーもあります。（スライドは、気さくな兵士とツーショット）。イムジン河は歌にもなっていて、ザ・フォーク・クルセイダーズや、キム・ヨンジャさんが、祖国の分断を歌いました。ご年配のお客さんには（失礼）、なじみがある地名かもしれません。このイムジン河と、支流のハンタン河の流域には、非常に数多くの旧石器時代遺跡が分布しています。全谷里遺跡の発見後に、数箇所遺跡は発掘調査されて、韓半島の前期・中期旧石器時代研究の基準資料になっています（スライドでホン・ヘウォン氏の地図紹介）。友人のソウル大学イ・ソンボク教授（当時）は、分布調査を実施していた際に、北朝鮮のスパイ的な疑いをかけられた話をしてくれました。1997 年に私を遺跡に案内してくれた時、戦車壕があちこちにありました。壕は地中に掘って作るの、その地層断面に旧石器が埋まっているのを探索していましたが、高性能カメラや詳細な地形図、双眼鏡などを所持し疑われたお話は、歴史的な悲劇を思い出させ、忘れられません。余談でした。

第 2 回世界バイフェース石器会議

・全谷先史博物館がオープンしたのは 2011 年 5 月で、現地での記念行事として「第 2 回世界の前期旧石器と中期旧石器における両面加工石器（バイフェース）国際会議」が開催されました。東日本大震災の直後でしたが、動いている交通機関を乗り継いで、何とか到着、参

加することができました。私は大分県早水台遺跡の前期旧石器に認められる、バイフェース的要素について発表しました（東北大学・柳田俊雄教授と連名）。早水台遺跡の石器群には、東アジアの同時代石器群と共通の要素が顕著に認められるという要旨です。講座では、会議の模様を多数のスライドで紹介しました。招待されていた基調報告者・総括者は、フランス・人類博物館（ミュゼ・ド・ロム）のアンリ・ドゥルムレイ先生でした。会議組織者はペ・キドン先生です。

・かつての定説であったモヴィウス・ラインの存在、すなわち前期旧石器時代のユーラシアは、インド西部を境に、東・東北のチョパー・チョピングトゥール文化圏と、西のハンドアクス文化圏に分かれていたとの考えは、全谷里などの韓国前期旧石器の様相によって、再検討を要すること、アシュール文化の東漸問題の再検討が論題でした。各国からの多くの報告で、モヴィウス・ライン説を、現在の先史学の研究水準で、描き直してみることになりました。たとえば、ヨーロッパの東側には、小型の剥片石器文化があつて、東方との共通点が認められる（ハンガリー、ヴェルテスズールス遺跡など）。東アジアでは、ハンドアクスは存在するが、石器文化全体の性格は、やはりアシュール文化とは、相異が大きい。中国で、ハンドアクス（手斧）の石器は、全国多数の遺跡から出土していることの紹介（中国科学院・古脊椎動物と古人類研究所（当時）、李超榮氏）など、世界の研究現状を確認する会議でした。

・ペ・キドン先生の総括まとめがあり、東アジアでは、朝鮮半島、中国各地で、ハンドアクスを含む両面加工石器の文化が、続々と発見されている。ヨーロッパ、アフリカの典型的なアシュール文化と大きく相異なる点は、石器の原材料である石材の違い、また人類の適応方策の多様性が、要因として影響した結果であるとの可能性を示し、提言をされました。それは、「アシュール文化」の東アジア的な形として、区別して「全谷里文化」と呼称しようという考えです。「チョンゴニアン」と「アシュレーアン」を比較するということになるでしょう。以上、全谷先史博物館開館記念についてお話しましたが、先史考古学における国際交流ということの実際を、多少ともお伝えすることができたなら、幸いです。

（本稿は、館長講座での配布資料に補足したものです。）